

死を通して生を考える試みにおける 小グループディスカッションの有効性の検討

西山美聡・石田 弓

A study of validity of small group discussion in experiments on consideration through death

Misato Nishiyama and Yumi Ishida

本研究では「自分の人生により能動的な姿勢を示すようになること」、「他者との関わり大切さを見出し、積極的な関わりを志向するようになること」を目標とし、デス・エデュケーションの教授方法としての小グループディスカッションと、その準備段階としての記述課題の有効性について検討した。研究Ⅰでは、生き方尺度（板津、1992）を用い、小グループディスカッションと記述課題の有無が参加者に与える教育効果の量的な測定を試みたが、この尺度からそれらの教育効果を明らかにすることはできなかった。研究Ⅱでは、ディスカッションを経て生き方に関する参加者の意見がどう変化するかを検討した。結果として、ディスカッションは能動的な生き方、人間関係を大切にする生き方の志向を促進し、本研究の2つの目標の達成に有効であることが確認された。この成果は、ディスカッションの中で参加者が他者の意見を知り、自分の意見を再吟味し、広がりや深みのある意見を持つに至ること、死を自分自身の問題として扱うことができるようになることから得られたものであった。また、記述課題はディスカッション前に参加者の意見を明確にし、活発な議論を可能とする点で有効であった。

キーワード：デス・エデュケーション、小グループディスカッション、記述課題

問題と目的

死をめぐる近年の動向

近年、病院死の一般化により、死が日常から切り離されつつある。さらに、病による死を克服することを使命としてきた医療のあり方は「生は尊く、死は好ましくないもの」という考えを強化し（小松、2000）、死について公に語ることをタブー視する風潮がある。現代は、実際に死に直面する機会がないばかりでなく、死に関する語りを他者と共有する機会も少なくなっているのである。しかし、デーケン（1986）は、「自分の死」を考えるには「自分の生命」を考えなければならないと述

べている。自分の死について考える時、人はそこに至るまでにどのような人生を歩みたいかを考える。信念をもって生きることが、より良い人生を生きることにつながるという考えである。

デス・エデュケーション

この考えに基づき、近年日本でもデス・エデュケーションが広がっている。これは、「死を身近な問題として考え、生と死の意義を探求し、自覚をもって自己と他者の死に備えての心構えを習得すること（デーケン、1986）」を目的とするものである。デーケンはデス・エデュケーションの目標の1つとして、「死を身近な問題として考え、生と死の意義を探求し、自覚をもって自己と他者の死に備えての心構えをさせること」を挙げている。自己と他者の死に備えての心構えとは、死までの生をどのように生きるかを考えることと捉えることができる。佐伯・高内（2008）によると、青年期は自己のアイデンティティを形成し、自己を評価し、将来の方向性を決めていく時期であり、人生観の確立が重要な発達課題の1つとなる。青年期に、死を見据えて自分の生き方を考えることは、人生観を深めることに有効に働くことが予想される。

デス・エデュケーションの教授方法としての小グループディスカッション

關戸（1999）は、デス・エデュケーションの教授方法を大別し、最も多く実施されているものとして「小グループ討議型」（本研究では「小グループディスカッション」）を挙げている。この教授方法は、講義や視聴覚教材、新聞・雑誌、体験談の講演などによって動機付け・問題提起を行った後で、小グループでの話し合いを行うものである。主眼は話し合いに置かれ、話し合いの中でのやり取りからの成果が期待される。Thornton（1991）はこの教授方法について、レポート課題を伴う方法を提唱している。Thornton は大学の講義としてのデスエデュケーションの中で、講義前に新聞や雑誌の記事などの教材と、その内容に関するレポート課題を学生に提示する方法をとり、レポートをもとに講義内で小グループディスカッションを行うという流れを踏んでいる。講義終了後にその講義方法の有効性を学生たちに評価させ、自分の考えをレポートとして紙面上にまとめることが、自分の考えをより明確にするのに有効であることを明らかにしている。

小グループディスカッションにおいては、他者からの新しい価値観を知り（石田、2008；Thornton、1991）、それに基づいて各自が自分の考えに更に深みと幅をもたせることができること（片岡・岡崎、2008）、自分の考えや感じ方にもより敏感になる（Thornton、1991）ことが言われている。新たに出会う考えと、それまでの自分の考えとを比較吟味（丸野・生田・堀、2001）し、自分の考えを再構成していく作業が行われると言える。これを生と死をテーマとしたディスカッションにあてはめると、この自分の考えを再構成する過程において、自分の生と死についての問題を能動的に自己の内部で扱い吸収していこうとする動きが活性化されることが推測される。このような動きは肯定的な死生観を形成し、さらに人生に対して積極的な姿勢を持つことにもつながるものである（丹下、1995）。したがって、ディスカッションを経ることにより、生と死についての問題を自分自身に引きつけ、また、自分の人生により能動的な姿勢を示すことが可能になると考えられる。しかし、我が国においてデス・エデュケーションは未だ開拓途中の分野であり、ディスカッションの教育効果について詳細な検討はなされていない。そこで本研究では、ディスカッションを通して参加者の意見がいかに変化するか、また、意見の変化がディスカッションの中のどのようなやり取りを通して生じたか

について検討する。その際、ディスカッション前の記述課題の効果についても合わせて検討する。

デス・エデュケーションの教育効果の測定

これまで行われてきたデス・エデュケーションの教育効果としては、命の大切さの再確認や、前向きに生きる姿勢を重視するようになる（尾上・中根，2005，秋山・加藤，2003）といったものが挙げられる。しかし、これらの効果は、いずれの先行研究においても感想文などの自由記述から判断されたものであり、尺度によって量的に検証しているものではない。そこで本研究では、死を通して生を考える試みが参加者の生き方についての考えにいかに関与を与えるか、板津（1992）の生き方尺度（Life Attitude Scale）を用いて量的に検討することとする。この尺度は、今という時間を大切にしつつ、目標達成への努力を惜しまない積極性を意味する因子1「能動的実践的態度」、自己の成長・可能性の開発への積極的な姿勢と、それを支える自己への柔軟性を有することを意味する因子2「自己の創造・開発」、個としての自己の行為は責任を持ってやり遂げる一方で、人間1人の力の限界を自覚しているために、他者を尊重し、周囲と調和的・協力的でありたいということをもたらす因子3「自他共存」、自己の内面的な安定感に支えられた、こだわりのなさ、執着心のなさの因子4「こだわりのなさ・執着心のなさ」、自己中心的ではない、他者を尊重した姿勢を意味する因子5「他者共存」の5因子からなる。

本研究のディスカッションにおける目標

先述した通り、ディスカッションを経ることによって、参加者が人生に対して積極的な姿勢を持つようになることが期待されることから、目標ⅰとして「自分の人生により能動的な姿勢を示すようになること」を設定する。また、青年期の死に対する態度においては、自分自身と重要な他者との関連性に焦点が当てられており、青年期の大学生にとって他者の存在が欠かせないものである（松田，2000）。したがって、目標ⅱとして「他者との関わりの大切さを見出し、積極的な関わりを志向するようになること」を設定する。板津（1992）の生き方尺度は、これらの目標を達成しているかどうかを測定するものとしても有効と判断した。

本研究では、目標ⅰ、ⅱのもと、デス・エデュケーションの教授方法としての記述課題とディスカッションの有効性を、記述課題とディスカッションを実施する群と実施しない群に分け、各群に「死を通して生を考える試み」が及ぼす効果を比較することにより検討する。記述課題とディスカッションを実施する前の動機付けとして、映画を視聴させる。映画は、西山・石田（2012）でデス・エデュケーションの教材として、命の有限性や他者との繋がりの大切さについて考えさせるのに有効であることが確認された「死ぬまでにしたい10のこと（My Life Without Me）」（2003，カナダ，出演：サラ・ポリー，スコット・スピードマン，監督：イザベル・コイシェ）を使用する。

研究Ⅰ

目的

生き方尺度（板津，1992）を用い、映画視聴後の記述課題への取り組みの有無及びディスカッションへの取り組みの有無によって、本研究における目標ⅰ「自分の人生により能動的な姿勢を示す

ようになること」、目標 ii 「他者との関わり的重要性を見出し、積極的な関わりを志向するようになること」の達成にどのような差が生じるかを検討する。ディスカッションを経ることによって参加者が人生をより能動的に生きることを志向するようになること、また他者との関わりにも能動的な態度を示し、他者とのつながりを重視するようになることを仮説とする。

方法

参加者 大学生 35 名（男性 12 名、女性 23 名、平均年齢 20.69 歳）。記述課題①・ディスカッションあり群（8 名）、ディスカッションのみ群（8 名）、記述課題①のみ群（10 名）、統制群（9 名）の 4 群を設定した。ディスカッションを実施する記述課題①・ディスカッションあり群、ディスカッションのみ群では 4 人を 1 グループとし、2 グループずつ編成した。

調査全体の流れ 4 群それぞれを異なる手続きのもとで実施した。調査実施の流れを Figure 1 に示した。まず、全群に質問紙（プレテスト）を実施し、映画を視聴させた。映画は i）主人公の生き方、ii）主人公がどう周囲に関わるかの 2 点について意識しながら視聴するように教示した。映画視聴後、全群において 10 分間の休憩をとった。休憩後、記述課題①・ディスカッションあり群では記述課題①、ディスカッション、2 度目の質問紙（ポストテスト）、記述課題②の順に実施した。記述課題①は、映画視聴後の参加者個人の意見を記述させるもの、記述課題②はディスカッションを終えての意見を記述させるものであった。ディスカッションのみ群では休憩後すぐにディスカッションを実施し、2 度目の質問紙を、感想文の順に実施した。記述課題①のみ群では、休憩の後に記述課題①、2 度目の質問紙を実施して終了とした。記述課題①・ディスカッションなし群では、休憩後に 2 度目の質問紙への回答のみで終了とした。

質問紙 板津（1992）の生き方尺度を使用した。この尺度は、物事に取り組む姿勢や日常における心のもち方、人間関係についての考え方など、生きる姿勢を問う項目からなるものである。28 項目、「全くあてはまらない」から「いつもあてはまる」までの 5 段階により評定する。

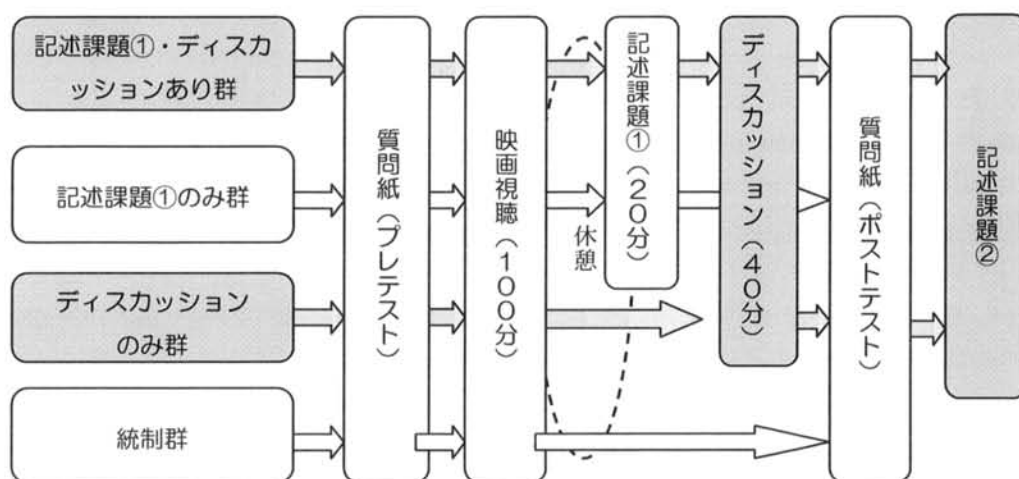


Figure 1. 調査実施の流れ

映画 「死ぬまでにしたい 10 のこと (My Life Without Me)」(2003, カナダ, 出演: サラ・ポリ一, スコット・スピードマン, 監督: イザベル・コイシエ) を使用した。この映画は、2 人の幼い娘と、失業中の夫と暮らすアンが、23 歳で余命 2 ヶ月を宣告される。その事実を誰にも告げないことを決めたアンは、「死ぬまでにしたい 10 のこと」をノートに書き出し、1 つずつ実行してゆくというストーリーである。西山・石田 (2012) で青年に対して人生の有限性について意識させ、生き方、他者との関わり方について考えさせるのに有用であることが確認された。

記述課題① 映画『死ぬまでにしたい 10 のこと』を視聴した後で、次の課題 1, 2 に回答させた。課題 1 「アンは死の宣告を受けたあとに死ぬまでにしたい 10 のことをリストに書き出しました。死の宣告を受けた後のアンの生き方について、あなたはどう感じ、アンはどうすべきだったと考えますか。理由も含め、以下の 2 つの点から述べてください。i) 残された時間の使い方、生きる姿勢について。ii) アンの周囲の人への関わりについて (身近な人々にメッセージを残したり、父親に会いに行ったりしたことについて)」、課題 2 「課題 1 でのあなた自身の考えを受けて、あなた自身はこれからの人生をどのように生きたいと考えますか。以下の 2 つの点について述べてください。i) 人生が有限であることを意識した上で、自分自身のためにどのように生きたいと考えますか、ii) 周囲の人とどのように関わりたいと思いますか」

記述課題② ディスカッション後に次の課題に回答させた。「ディスカッションを終えて、現時点でのあなたの考えを述べてください。あなたはこれからの人生をどのように生きたいと考えますか。以下の 2 つの点について述べてください。i) 人生が有限であることを意識した上で、これからの人生を自分自身のためにどのように生きたいと考えますか。ii) 周囲の人とどのように関わりたいと思いますか。」

ディスカッションのテーマ 本研究の目標 i, ii に沿い、テーマ i 「自分の人生が有限であることを意識した上で、これからの人生を自分のためにどう生きたいか」、テーマ ii 「これからの人生で周囲の人にどのように関わっていきたいと思うか」の 2 点を設定した。これらは記述課題①の課題 2 の i), ii), 記述課題②の i), ii) とそれぞれ対応するものとした。

ディスカッションの手続き 最初に「アイスブレイク」を行った後、ディスカッションの「テーマ」、「進め方」、「ファシリテーター (司会者) の役割」について教示した。また、参加者が発言しやすいディスカッションを目指すために、他人の意見を批判したり、他の人が話している途中で遮るように発言しないこと、どのような意見を言っても正解や不正解は一切ないことを教示した。ディスカッション実施の詳細について以下に示した。

1. アイスブレイクでは参加者に 2 人 1 組で「今日の調子」、「趣味」、「好きなもの」の 3 つのテーマのいずれかについて、2 分で互いに紹介をさせた。メンバー全員と 1 回ずつ話すようにした。
2. ディスカッションの時間は 2 つのテーマに各 20 分の計 40 分であった。各テーマについてのディスカッションの最初に、メンバー全員にその時点での個人の意見を発表させた (以降「最初の発表」)。その後、最初の発表での意見を基に、自由に話し合いをさせた (以降「自由討論」)。
3. ファシリテーターは筆者が務めた。ファシリテーターはあくまで軌道修正など、話し合いの進行のサポートに徹し、参加者の意見の評価や、自分の意見を述べることは一切なかった。また、

参加者の発言の要点を A6 用紙に記述し、参加者から見える位置に並べた。

結果

本研究では参加者数が 1 群あたり 8～10 名と少なく、生き方尺度の因子分析に耐え得ないと判断されたため、生き方尺度の因子構造は板津（1992）のものを使用した。

生き方尺度について、調査の前後（2）×ディスカッションの有無（2）×感想文の有無（2）3 要因の分散分析を行った。Table 1 にその結果を示した。全得点および因子 1～4 における調査の前後の主効果が有意であり（全得点： $F(1, 31) = 28.94, p < .001$ ；因子 1： $F(1, 31) = 16.38, p < .001$ ；因子 2： $F(1, 31) = 12.99, p < .001$ ；因子 3： $F(1, 31) = 14.17, p < .01$ ；因子 4： $F(1, 31) = 9.82, p < .05$ ），いずれも調査前の得点よりも調査後の得点の方が有意に高い得点を示した。また、因子 4 においては調査の前後×感想文の有無の 2 次の交互作用が有意であった。これに注目すると、感想文がある場合における調査の前後の主効果が有意であり（ $F(1, 31) = 14.17, p < .01$ ），調査前の得点よりも調査後の得点が有意に高かった。

考察

本研究では、全得点及び因子 1～4 において、調査の前後における得点の差が見られた。しかし、群間における差は、感想文の有無の影響が因子 4「こだわりのなさ・執着心のなさ」において見られたのみであった。全体および他の因子では、ディスカッションの有無及び感想文の有無の影響は見られなかった。本研究では、ディスカッションを経ることによって人生や人間関係に対するより能動的な姿勢が志向されるようになることを仮説としていたが、これは支持されなかった。1 つには生き方尺度（1991）が、積極性や道徳性など、一般的に好まれる回答を判断しやすい尺度であり、群を問わず参加者がより好ましい回答を選んだためと推察される。

因子 1「能動的実践的態度」、因子 2「自己の創造・開発」、因子 3「自他共存」、因子 4「こだわりのなさ・執着心のなさ」で、調査後に有意に高い得点が見られた。因子 1, 2 は、本研究における目標 1「自分の人生により能動的な姿勢を示すようになること」に該当するものと言える。また、因子 3 は自己の行為に責任を持つ一方で、人間 1 人の力の限界を自覚しているために、他者を尊重し、周囲と調和的・協力的でありたいということを表わすものであった。したがって、映画の視聴・記述課題・ディスカッションといった死について考える経験を通して、人生に対する能動的な姿勢や、人との繋がりを重視する姿勢が促進されたと言える。因子 5「他者共存」で、調査前後の差が見られなかったのは、この因子を構成する項目が 4 項目と少なく、さらにその中に天井効果となりやすい項目が含まれていたためと考えられる。

次に、因子 4「こだわりのなさ・執着心のなさ」において、記述課題がない場合よりも記述課題がある場合に調査後の得点に大きな上昇が見られたのは、映画の内容が影響したと考えられる。映画では、死を目前にした主人公が日常の出来事を些細なことと感じるようになる場面がある。記述課題に取り組む段階において、主人公の生き方に共感を覚えることにより、些細なことに執着しない態度を志向する傾向が強まったのではないかと考えられる。このことから、映画の内容が参加者の考えに及ぼす影響を強化する効果を、ディスカッション前の記述課題が持つことが示唆された。

以上の通り、研究 I では、参加者の志向する生き方にディスカッションが及ぼす影響を、尺度を

用いて量的に検討することはできなかった。本研究においては、ディスカッションを経ることにより、参加者の意見に深まりが見られることを仮説としていたが、この変化は数値には表れないため、研究Ⅱにおいて参加者の意見の変化から、ディスカッションの影響を詳細に検討する。

研究Ⅱ

目的

目標ⅰ「自分の人生により能動的な姿勢を示すようになること」、目標ⅱ「他者との関わりの大切さを見出し、積極的な関わりを志向するようになること」のもと、ディスカッションが参加者の意見に与える影響の詳細について検討する。ディスカッション前後における参加者の意見を比較し、そこで見られた意見の変化から、目標ⅰ、ⅱの達成に小グループディスカッションが有効であるかどうかを判断することとする。小グループディスカッションにおける発言内容を追跡し、意見の変化がディスカッションの中のどのようなやり取りから生じたかについても明らかにする。また、ディスカッション前の記述課題を実施する群と実施しない群の2群を設け、各群のディスカッションの進行の特徴を明確にし、それらを比較することにより、ディスカッション前の記述課題の有効性についても検討する。ディスカッション前の記述課題を実施することで、参加者が自分の考えを明確にでき、ディスカッションのスムーズな進行が可能になることを仮説とする。

方法

参加者 研究Ⅰに参加した者のうち、記述課題①・ディスカッションあり群、ディスカッションのみ群に参加した大学生。8名×2群、計16名（平均年齢20.69歳、男性7名、女性9名）。4名で1つの小グループとし、各群2グループを編成した。記述課題①・ディスカッションあり群の2つの小グループをグループⅠ、Ⅱ、ディスカッションのみ群の2つの小グループをグループⅢ、Ⅳとした。

手続き 研究Ⅰと同様。

分析方法 記述課題とディスカッションから得られたデータの分析方法について以下に記述する。

1. 小グループディスカッションの展開についてグループ別に分析する。まず、記録された各小グループディスカッションの逐語を作成した。次に、逐語をもとに各小グループにおける話をテーマごとにトピックとして分け、トピックをその上位カテゴリーとしての領域に分類した。トピックとは、ディスカッションの中で生じる、特定のテーマについての発話のまとまりのこととした。また領域とは、どのような視点からトピックが生じているかを分類するものとした。目標ⅰ、ⅱに沿うものや、各小グループディスカッションの特徴を反映するものを領域として設定した。各小グループディスカッションがどの領域で展開しているかを調べ、その特徴を記述した。また、各小グループにおける参加者の発話回数についても記述した。
2. ディスカッション前後における個々の参加者の意見を比較し、それらに変化があるかどうかを調べた。ディスカッション前の意見としては、「最初の発表」で出された意見を逐語化したものを扱い、記述課題①・ディスカッションあり群の場合は記述課題①の内容も扱った。ディスカ

- セッション後の意見は記述課題②での記述を扱った。これらをグラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach : GTA) によりカテゴリーに分類した。これを小カテゴリーとし、これらをより上位の大カテゴリーに分類した。個々の参加者のディスカッション前後の意見がどの小カテゴリーに含まれたかを明らかにし、個人においてディスカッション後で新たに見られたカテゴリー (以下「新規カテゴリー」) を、ディスカッションによる変化としてピックアップした。さらに、新規カテゴリーの度数を小カテゴリー、大カテゴリーごとに算出した。
3. 新規カテゴリーにおける意見が、ディスカッション前の意見からいかに変化したかによってラベル付けし、類似した変化が見られるものをグループに分類した (以下「変化の様相」)。
 4. ディスカッションの逐語から、ディスカッションの流れを追い、新規カテゴリーがどのようなやり取りから生じたかを調べた。類似した経過を辿ったと判断できるものをラベル付けし、類似した動きが見られるものをグループに分類した (以下「変化の経路」)。

結果

各小グループディスカッションの展開 各小グループディスカッションの展開の特徴を捉えるため、ディスカッションをトピックに区切り、それぞれを領域に分類した。領域は、自分の死までの人生全体を見直し、自分の実際の人生をどう生きたいかについての意見が出ているものを、「死までの人生の生き方」とした。この領域での議論は、デーケン (1986) の提唱するデス・エデュケーションの目標と一致するものと言え、本研究における目標 i, ii の達成を可能にするものである。その他、以下の5つの領域が見出された。「目先の未来」は、この先自分がどう生きたいかについて考えているが、新社会人としての生活、就職活動や大学生活など、比較的近い将来のことを考えるに留まったものであった。「余命が告知された状況での生き方」は余命が宣告されたという状況を仮定した上での生き方について議論したものであり、自分の人生について直接的な議論はなされなかったものであった。「“人生の有限性の意識”への引っかかり」は、筆者が提示した“人生の有限性を意識した上で”という前提に関して、「まだ若いから人生の有限性を意識難しい」、「“人生の有限性”とは何か」と、受け入れや解釈に困難を要したものであった。上記の領域のいずれにも属さないものについては、参加者の生き方についての議論には繋がらなかったため分類から除外した。

以下にグループごとのディスカッションの流れを記述した。Table 1 にグループ I のディスカッションの流れを示した。グループ I では、テーマ i の「最初の発表」の時点で「死までの人生の生き方」と「余命が告知された状況での生き方」の領域からの発表があり、自由議論の段階では「余命が告知された状況での生き方」の領域で話が展開した。「映画についての言及」、「“人生の有限性を意識する”ことへの引っかかり」も見られ、トピック 9 で「死までの人生の生き方」の領域での話が可能となった。テーマ ii では概ね「死までの人生の生き方」の領域で議論が行われた。

Table 2 にグループ II のディスカッションの流れを示した。グループ II では、トピック 7, 11 で「目先の未来」の領域が見られたが、その他のトピックは全てが「この先の人生の生き方」の領域にあると判断できた。

Table 3 にグループ III のディスカッションの流れを示した。グループ III では、テーマ i, ii とも「最初の発表」の時点で「この先の人生の生き方」と「目先の未来」からの発表が見られ、その後の自

由討論の段階でもこれら2つの領域が見られた。

Table 4 にグループIVのディスカッションの流れを示した。グループIVでは、テーマiの「最初の発表」の時点で「この先の人生の生き方」、「有限性の意識」の難しさ、「余命が告知された状況での生き方」の3領域から発表があった。自由討論の段階では、「この先の人生の生き方」の領域からの発言が見られつつも、「有限性の意識」の難しさへの執着が見られ、トピック8では“人生の有限性の意識”についての説明が必要となった。トピック9以降は「この先の人生の生き方」の領域での議論が可能となったが、テーマiiでもトピック17において“人生の有限性の意識”の難しさについての発言が見られた。

Table 1

グループ I (記述課題・ディスカッションあり群)におけるディスカッションの流れ

	トピック	死までの人生の生き方	死が告知された状況での生き方	“人生の有限性の意識”へのひっかかり	発話者*
最初の発表 (テーマ i)	1	精一杯物事に取り組む			P2, 4
	2		今までの生き方を変えずに日々を大切に		P1
	3	何気ない日常を大切に			P3
自由討論 (テーマ i)	4		他者に心配かけない		P1
	5		したいことをする		P4
	6		何気ない日常に感謝する		P1, 4
	7			まだ若いので、人生の有限性を意識しない	P1, 2, 4
	8		日常の1つ1つのことを大切に		P1, 4
	9	すべきことをして、後悔しない生き方			P1, 2, 4
最初の発表 (テーマ ii)	10	多くの人と楽しく過ごす			P4, 2
	11	他者の人生の有限性			P2
	12	他者に迷惑をかけない生き方			P1
自由討論 (テーマ ii)	13	何気ない関わりに感謝する			P3
	14	他者の人生の有限性			P1, 2, 4
	15	多くの人と関わる			P1
	16	死後、他者に偲んでもらえる人			P4

* Pは参加者 (Participant)

Table 2

グループⅡ(記述課題・ディスカッションあり群)におけるディスカッションの流れ

	トピック	死までの人生の生き方	目先の未来	発話者*
最初の発表 (テーマⅰ)	1	価値あるものの保存		P1
	2	やりたいことをして、後悔しない		P2, 4
	3	日々を充実させる		P3
	4	自分にとっての幸せが何かを考える		P4
自由討論 (テーマⅰ)	5	価値あるものの保存		P1, 2
	6	他者の思い出として残る		P3, 4
	7		自立	P1
	8	やりたいことをして、後悔しない		P1, 2
	9	自分にとっての幸せが何かを考える		P3, 4
	10	小さな幸せ		P1, 4
最初の発表 (テーマⅱ)	11		メリハリのある生活	P3
	12	誠実さの重視		P4
	13	頼り合える人間関係		P3
	14	思いを伝える		P2
自由討論 (テーマⅱ)	15	気配りをする		P1
	16	気配りをする		P1, 4
	17	頼り合える人間関係		P1, 3
	18	思いを伝える		P3, 1
	19	自分の行動が他者に与える影響を考える		P2
	20	誠実さの重視		P4

* Pは参加者 (Participant)

Table 3

グループⅢ(ディスカッションのみ群)におけるディスカッションの流れ

	トピック	死までの人生の生き方	目先の未来	発話者*
最初の発表 (テーマⅰ)	1		時間を大切にする	P1, 2
	2	歳をとった時の理想の姿		P4
	3		大学で何を学びたいかを明確にする	P3
自由討論 (テーマⅰ)	4	歳をとった時の理想の姿		P1
	5		就職活動で初めて自分のしたいことを考えた	P1, 2, 4
最初の発表 (テーマⅱ)	6		積極的に他者と関わる	P2, 3
	7	身近な人を大切にする		P1, 3
	8	周囲の人を大切にする		P4
	9		年上の人から学ぶ	P1, 3
自由討論 (テーマⅱ)	10		積極的に他者と関わる	P2
	11	他者の人生の有限性/後悔しない関わり		P2, 4
	12	自分の人生の有限性を意識して生きる		P1

* Pは参加者 (Participant)

Table 4

グループIV(ディスカッションのみ群)におけるディスカッションの流れ

	トピック	死までの人生の生き方	死が告知された状況での生き方	“人生の有限性の意識”へのひっかかり	発話者*	
最初の発表 (テーマ i)	1		いつも通りの生活を大切ににする		P1	
	2			人生の有限性を意識することの難しさ	P2, 4	
	3	時間を大切ににする			P2	
自由討論 (テーマ i)	4	ゆとりをもって生きる		人生の有限性を意識しない	P3	
	5	後悔しない生き方			P4	
	6	いつも通りの生活を大切ににする			P4	
	7			高齢者の立場の想像	P1, P3	
	8			“人生の有限性の意識”の定義	P1, 4, F	
	9	時間を大切ににする			全員	
	10	自分の気持ちを尊重する			P3, 4	
	11	よくない関係を改善する			P4	
最初の発表 (テーマ i)	12	深い関係を築く			P1, 4	
	13	誠実さの重視			P3, 4	
	14	周囲により影響を与える			P3	
	15	出会いを大切ににする			P2	
	自由討論 (テーマ ii)	16	身近な人を大切ににする			P2
		17			人生の有限性を意識することの難しさ	P1
		18	深い関係を築く			P1, 3, 4
		19	相手を受け入れる姿勢			P3, 4
		20	根気強く関係を築く			P1

* Pは参加者 (Participant)

各小グループの参加者による発話回数 グループ I は、全発話数 132 回のうち、参加者の発話が 112 回、ファシリテーターの発言が 20 回であった。グループ II は全発話数 73 回のうち、参加者の発話が 54 回、ファシリテーターの発言が 19 回であった。グループ III は全発話数 44 回のうち、参加者の発話が 25 回、ファシリテーターの発言が 19 回であった。グループ IV は全発話数 61 回のうち、参加者の発話が 42 回、ファシリテーターの発言が 19 回であった。

ディスカッション前後で見られた参加者の意見の分類 ディスカッションを実施する前後でいかに参加者の意見が変化したかを調べるため、G1A のカテゴリー生成の方法を参考にして、参加者の考えからカテゴリーを生成した。ディスカッション前の意見としては、両群における「最初の発表」での発話内容と、記述課題①・ディスカッションあり群における記述課題①の記述内容を分析対象とした。ディスカッション後の意見としては、記述課題②の記述内容分析対象とした。結果として 49 のカテゴリーが生成された。分類は 2 名の大学院生によって行い、その一致率は 67.0% であった。不一致なものについては 2 名の間で協議し、いずれかのカテゴリーに再分類した。さらに、これらをテーマ i, ii のいずれに該当するかを分類した。このカテゴリーを小カテゴリーとし、これらの

上位カテゴリーとしての大カテゴリーを生成した。テーマ i, ii の大カテゴリー及びそれに属する小カテゴリーと記述数を、Table 5, 6 に示した。各大カテゴリーに属する記述の数をディスカッション前後の合計、ディスカッション前、ディスカッション後に分けて示した。また、1 人の参加者がディスカッション後に初めて特定のカテゴリーに属する意見を呈した場合の記述数を「新規カテゴリー」として示した。そのため「新規カテゴリー」は、ディスカッションを通しての意見の変化

Table 5
テーマ i における大カテゴリーに分類された記述の度数

大カテゴリー	小カテゴリー	ディスカッション前後の合計	ディスカッション前*	ディスカッション後**	新規カテゴリー***
目標の達成	目標の達成	3	2	1	0
肯定的変化	肯定的変化	2	0	2	2
生き方の変更への消極的態度	無理をしない	10	8	2	0
	これまでの生き方の維持 人生の有限性を意識することの否定				
自分の気持ちの尊重	自分の気持ちを尊重した生き方	6	2	4	3
	したいことを見つける				
自分の特徴についての言及	自分の特徴についての言及	5	3	2	0
過去・現在の振り返り	過去・現在の振り返り	2	1	1	1
将来の展望	将来の展望	6	1	5	4
過去・現在の反省	過去・現在の反省	6	4	2	2
自分の特徴への気づき	自分の特徴への気づき	1	0	1	1
好ましくない物事にも意味を見出す	好ましくない物事にも意味を見出す	2	0	2	2
死後に何かを残す	価値あるものの保存	11	4	7	5
	価値あるものを他者に公開する				
	生きて証を残す				
	他者の記憶に残る				
自分の人生の有限性の意識	自分の人生の有限性を意識した生き方	9	5	4	2
	自分の人生の有限性の意識				
人生の有限性を意識することの難しさ	人生の有限性を意識することの難しさ	4	3	1	0
他者の命の有限性の意識	他者の命の有限性の意識	7	2	5	4
日常への意識の変化	日常の非普遍性	3	2	1	1
日常における心がけ	他者への感謝	20	8	12	9
	楽しく過ごす				
	小さな幸せを感じる				
	今できることをする				
	何気ない日常を大切に 時間を大切に する				
人生に対する積極的な態度	後悔しない生き方	25	9	16	9
	したいことに取り組む				
	物事に精一杯向き合う				
	死ぬ時に満足できる生き方 過程の重視				

* 「最初の発表」、記述課題①から得られたカテゴリー

** 記述課題②から得られたカテゴリー

***ディスカッション前で見られず、ディスカッション後において初めて見られたもの

Table 6

テーマ ii における大カテゴリーに分類された記述の度数

大カテゴリー	小カテゴリー	ディスカッション前後の合計	ディスカッション前*	ディスカッション後**	新規カテゴリー***
死がもたらす影響	死がもたらす影響	3	2	1	1
他者と関わる態度	自分の気持ちを尊重した関わり	37	21	16	10
	丁寧な態度で他者と関わる				
	努力して他者と関わる				
	消極的な関わり方				
	他者から学ぶ				
	後悔しない関わり				
	誠実さの重視				
	今ある関係を大切にする				
他者との具体的な関わり方	他者との共有	7	4	3	2
	気持ちを伝える				
他者との関わり方の重視	人間関係の重視	14	8	6	4
	他者の気持ちの尊重				
他者との関係性	互いに高め合う関係	13	6	7	4
	深い人間関係を築く				
他者との関係性	ありのままの関わり	2	1	1	1
他者の気持ちの尊重	他者の気持ちの尊重	11	5	6	4

* 「最初の発表」、記述課題①から得られたカテゴリー

** 記述課題②から得られたカテゴリー

***ディスカッション前で見られず、ディスカッション後において初めて見られたもの

と捉えることができる。小カテゴリーに属する記述数は多いものでも4であったため、取り上げないこととした。

各テーマに属する大カテゴリーのうち、ディスカッション前後で記述数に比較的大きな変化が見られたものを以下に挙げた。テーマ i では、大カテゴリー「日常における心がけ」、「人生における積極的な態度」は新規カテゴリー数が9であった。また、大カテゴリー「生き方の変更への消極的な態度」は度数が8から2に減少した。テーマ ii では、大カテゴリー「他者と関わる態度」は新規カテゴリー数が10と多く見られた。

変化の経路 「新規カテゴリー」がディスカッションの中のどのような発言・やり取りを通じて生じているのかについて、類似した経路を辿っていると考えられるものを分類し、ラベル付けした。その結果、「他者からの取り入れ」、「他者からの取り入れ・発展」、「自分の考えについての再考」、「発表の中での深まり」、「テーマからの深まり」、「特定不能」の6つが見出された。これらが各小グループディスカッションにおいて生じた数を Table 7 に示した。「他者からの取り入れ」は、ディスカッションの中での他者の発言をそのまま自分の考えに取り入れたものであった。47.6%の新規カテゴリーがこれに分類された。「他者からの取り入れ・発展」は、他者の考えを取り入れ、さらにそれを自分の中で発展させているものとした。18.0%の新規カテゴリーがこれに分類された。「自分の考えについての再考」は、発表された意見に質問や指摘などを受けることにより、その意見を発表した参加者が自分の考えに再度注目し、それについて考え、より深い考えに至ったものであっ

Table 7 ディスカッション前後で見られた記述内容の変化の経路の分布

変化の経路	グループⅠ	グループⅡ	グループⅢ	グループⅣ	合計
他者からの取り入れ	8	9	5	7	29 (47.6)
他者からの取り入れ・発展	2	1	6	2	11 (18.0)
自分の考えについての再思考	2	2	0	2	6 (9.8)
発表の中での深まり	1	0	0	0	1 (1.6)
テーマからの深まり	1	0	3	1	5 (8.2)
経路の特定不能	1	2	3	3	9 (14.7)

()内は全体に対する比率。

Table 8 ディスカッション前後で見られた記述内容の変化の様相の分布

変化の様相	グループⅠ	グループⅡ	グループⅢ	グループⅣ	合計
新たな考え	7	10	12	11	40 (65.6)
価値の変化	3	1	0	1	5 (8.2)
自分の問題としての引きつけ	2	0	1	2	5 (8.2)
具体化	3	1	0	1	4 (6.6)
発展	1	0	2	1	4 (6.6)
気づき	1	0	0	1	2 (3.3)

()内は全体に対する比率。

た。9.8%の新規カテゴリーがこれに分類された。「発表の中での深まり」は、発表の最中に、その発表者の中で考えが深まりや、新しい意見が出現する様子が見られたものであった。1.6%の新規カテゴリーがこれに分類された。「テーマからの深まり」は、ディスカッションの中での発言が見られるもので、他者の意見からの影響よりも、その時の議題について考えることで、考えの深まりや新たな意見が生じていると判断されるものとした。8.2%の新規カテゴリーがこれに分類された。「特定不能」は、記述課題②の段階で意見の変化や新たな意見の出現が明らかに見られるが、ディスカッションのどの発言に影響を受けたかを特定することができないものとした。14.7%の新規カテゴリーがこれに分類された。

変化の様相 「新規カテゴリー」としてカウントされた意見をディスカッション前の意見と比較し、変化の様相が似通ったものを分類し、ラベル付けをした。その結果、変化の様相として「新たな考え」、「価値の変化」、「自分への引きつけ」、「具体化」、「発展」、「自分についての気づき」の6つを見出した。各小グループディスカッションにおけるこれらの出現数をTable 8に示した。「新たな考え」は個人において、ディスカッション前には同じ、あるいは類似した考えが見られず、ディスカッションを通じて全く新しく得られたと判断されるものであった。新規カテゴリーの65.6%がこれに分類された。「価値の変化」はディスカッション開始時に抱いていた特定の価値観を、ディスカッションを経ることで見直し、ディスカッション後にその様相が大きく異なるものになったものとした。新規カテゴリーの8.2%がこれに分類された。「自分の問題としての引きつけ」は、ディスカッションを経て、参加者が死の問題を自分の問題として扱うことができるようになったものであった。新規カテゴリーの8.2%がこれに分類された。「具体化」はディスカッション開始時に抽象的であった考えが、ディスカッション後にはより具体的なものに変化したものとした。新規カテゴリーに分類の6.6%がこれに分類された。「発展」はディスカッション前に参加者が抱いていた特定の考えが、ディスカッション後により深い考えに至っていると判断されたものであり、新規カテゴリー

の6.6%がこれに分類された。「自分についての気づき」はディスカッションでのやり取りを通じ、それまで意識されていなかった自分の特徴を見出したものや、自分の特徴に新たな評価を与えているものとした。新規カテゴリーの3.3%がこれに分類された。

考察

ディスカッションの準備段階としての記述課題の有効性 研究Ⅱでは、ディスカッションの準備段階としての記述課題①がディスカッションの進行に及ぼす有効性について、記述課題①・ディスカッションあり群とディスカッションのみ群を比較することによって検討することを目的とした。仮説として、記述課題①に取り組むことにより、参加者が自分の考えを明確にし、ディスカッション内の発言がなされやすくなること、ディスカッションでのやり取りが円滑に進むことを挙げていた。これについて、両群のディスカッションの展開の特徴から検討する。「死までの人生の生き方」について考えることがデーケン（1986）の提唱するデス・エデュケーションの目標に沿うものであり、本研究でのディスカッションにおいても議論したいポイントであった。記述課題①・ディスカッションあり群に属するグループⅠでは「死までの人生の生き方」についての議論が可能とるまでに時間を要した。これは“人生の有限性の意識”についての参加者の解釈が、ディスカッションの序盤において筆者の意図したものと異なり、解釈をグループ内で一致させるのに時間を要したためであった。しかし、発話量の多さからは、意見のやり取りが活発に行われたことが分かる。グループⅡでは、ディスカッションのほとんどが「死までの人生の生き方」についての議論であった。それに対し、ディスカッションのみ群であるグループⅢでは比較的近い未来のことが話され、“人生の有限性を意識する”ことが難しい様子がうかがわれた。また、グループⅢでは極めて発話量が少なく、ディスカッションの滞りが多かった点も特徴的であった。グループⅣでは“人生の有限性を意識する”ことに否定的な意見も多く、「死までの人生の生き方」について議論するまでに時間を要した。以上から、“人生の有限性を意識する”ことについての困難さが、ディスカッションのみ群の2グループにおいて共通していたことが分かる。“人生の有限性の意識”の困難さは、グループⅠにも見られたが、この困難さを抱えながらもディスカッションが活発に行われた。それに対し、グループⅢ、Ⅳでは発話の滞りや議論の難航が見られた。記述課題①・ディスカッションあり群とディスカッションのみ群との間にこのような違いが生じたのは、記述課題①に取り組む段階で、その前提について個々人の中で試行錯誤し、一応の納得がなされ、その上で自分の考えを明確にしたことによると推測される。参加者がディスカッション前に個人の意見を明確にできた点は、Thornton（1991）と一致するものである。そして、その上でディスカッションに臨むことで、ディスカッション内での活発なやり取りが可能となると言える。

ディスカッション前後における参加者の意見の変化 研究Ⅱの目的は、生と死をテーマとするディスカッションの中で、参加者の意見がいかに変化するかを検討し、またディスカッション前の記述課題がディスカッションの進行に有効に作用するかどうかを検討することであった。仮説として、ディスカッションを行うことにより、参加者がより能動的に生きることを志向するようになること、他者に対して積極的に関わることを、他者との関係性を大切にすることを志向するようになることを挙げていた。本研究では、ディスカッション前後における意見の変化を判断するため、ディスカッ

ジョン後に個人に新たに見られた意見を「新規カテゴリー」として取り上げ、ディスカッションの成果とみなした。度数の多かった新規カテゴリーから、ディスカッションが参加者の意見にいかの影響したかについて、テーマ i, ii のそれぞれについて考察する。テーマ i 「自分のためにどのように生きたいか」に関するものとして、大カテゴリー「日常における心がけ」、「人生に対する積極的な態度」が見られた。「日常における心がけ」は、小カテゴリー「何気ない日常を大切にする」、「時間を大切にする」、「小さな幸せを感じる」といったものを含む。日々の生活の些細な事柄にも細やかに心を配り、日常を大切にするのを心がけながら生きようとする態度と言える。「人生に対する積極的な態度」は、これに含まれる小カテゴリー「後悔しない生き方」には、“すべきことはして、後悔しないように生きたい”、“したいことを全部して、悔いを残さないようにしたい”といった記述があり、物事に精一杯取り組んだ結果として後悔のない生き方ができるようになるという考えであった。したがって、大カテゴリー「人生に対する積極的な態度」は、積極的に物事に取り組む、参加者が自分の力を精一杯発揮し、能動的に生きようとする態度を表わすものと言える。次に、ディスカッション前後で出現数が大きく減少したカテゴリー、つまりディスカッションを経てそのカテゴリーに属する考えが参加者の中で弱まったと考えられるものについて述べる。大カテゴリー「生き方の変更への消極的な態度」に減少が見られた。これは、生と死について考える機会を得たからと言って、“今現在の自分の生き方を変えるつもりはない”という内容のものである。この大カテゴリーは小カテゴリー「人生の有限性について意識することの否定」を含むものであり、「人生の有限性について意識することの否定」は人生の有限性を意識することに有効性を見出せないために、今現在の人生を有限性を意識しない生き方を変えるつもりはないという意味を表わすカテゴリーであった。しかし、ディスカッション後にはこのような記述が減少しことから、ディスカッションを通して参加者が“人生の有限性”を意識することの有効性を見出すに至ったと考えられる。このような変化は、日常の生活が決して当たり前ではなく、かけがえのないものであるということや、時間の大切さについて議論する中で、生じたものと考えられる。

テーマ ii “周囲の人とどのように関わっていききたいか”においては、大カテゴリー「他者と関わる態度」がディスカッション後に増加した。このカテゴリーは小カテゴリー「誠実さの重視」、「丁寧な態度で他者と関わる」などを含み、他者とどのような態度で関わるべきかについて具体的に考えるものである。これに対して、ディスカッション後に減少した大カテゴリー「他者との関わりの重視」は、他者との関わりの重要性について述べるに留まっており、他者とどのように関わっていききたいかについては述べていないものであった。抽象的内容の「他者との関わりの重視」が減少し、より具体的な内容である「他者と関わる態度」が増加したことから、ディスカッションを経ることで、他者との関係性についてより具体的なレベルに考えを深めることができたと考えられる。また、「他者と関わる態度」に含まれる小カテゴリーにおいて比較的記述数の多かった「努力して他者と関わる」は、“あまり関わったことのない人とも積極的に関わる”、“良くない関係も改善する”などであり、他者と関係において積極的な姿勢を志向する傾向が参加者の中で強まったと考えられる。

ディスカッション前後における意見の変化の経路 本研究では、変化の経路として「他者からの取り入れ」、「他者からの取り入れ・発展」、「自分の意見についての再考」、「発表の中での深まり」、

「特定不能」が得られた。「他者からの取り入れ」は先行研究(Thornton, 1991)においても、ディスカッションが参加者の考えに広がり・深みを持たせる上で有効に働く要因として挙げられているものであり、本研究においても最も多く見られた。この経路からの意見の変化が生じやすい理由としては、他者からの考えをそのまま取り入れることで成り立つという容易さが挙げられる。したがって、ディスカッションで出された意見以上の深まりはないが、その考えを取り入れた参加者の意見・視点が、取り入れ前と比べて広がりをもつことに有効に働くと考えられる。他者の意見を取り入れた上で、参加者個人の中でその意見を更に発展させているのが「他者からの取り入れ・発展」であった。取り入れた意見を発展させる過程では、取り入れた意見を自分の意見と比較吟味(丸野・生田・堀, 2001)し、自分の考えを再構成していく作業が行われたと考えられる。自分の考えの再構成は、「自分の意見についての再考」、「発表の中での深まり」においても生じている。三者は過程には違いがあるものの、自分の考えに再注目して見直し、その結果として思考の深まりやより深みのある意見の生成につながっているという点では共通している。また、「他者からの取り入れ」、「他者からの取り入れ・発展」、「自分の考えについての再考」は、他者の意見を聞いているだけでも生じるものであり、意見の変化を示した参加者がそのディスカッションの中で発言しない場合にも起こり得るものである。もちろんディスカッションでは全ての参加者が活発に意見を交わすことが望ましいが、発言せずにディスカッショングループの成員として存在しているだけでも、ディスカッションは参加者の考えに深みを与える上で有効であることが確認された。

ディスカッション前後における変化の様相 次に、上記の変化の経路を経て、具体的にどのような変化の様相が生じているのかについて考察する。本研究で得られた変化の様相は、「新たな意見」、「自分についての気づき」、「価値観の変化」、「自分への引きつけ」、「発展」、「具体化」の6つであった。まず、「新たな意見」は、ディスカッションを経て参加者がディスカッション前に持っていなかった意見を持つに至ったものである。「発展」、「具体化」は、ディスカッションを経て参加者がディスカッション前にも持っていた特定の考えを深めるに至ったものである。これらの変化の様相が見られたことから、先行研究でも挙げられている、各自が自分の考えに更に深みと幅をもたせることができる(片岡・岡崎, 2008)という効果が本研究においても確認された。また、「価値観の変化」はディスカッションを経て大きく参加者の価値観が変化したものであった。価値観を大きく変化させるにはそれだけの大きな影響力が必要と考えられ、ディスカッションの経験が参加者にそれだけのものをもたらす可能性が示唆された。「自分への引きつけ」はディスカッションを経て、参加者が死の問題を自分の問題として扱うことができるようになってきているものである。「自分についての気づき」もまた、どのように生きるべきかという問題と参加者自身の今現在のあり方を比較検討した結果として生じたものである。ディスカッションには、生と死の問題を自分に近づけて考え、それによって自分の生き方についてより現実に沿って考えることを可能とする効果があると思われる。

まとめ

本研究では、デス・エデュケーションの教授方法としての記述課題を伴うディスカッションの有

効性を検討した。研究Ⅰにおいては、記述課題とディスカッションの効果を生き方尺度(板津, 1992)を用いて量的に検討することを目的とした。しかし、本研究で測定しようとしたものは、人生に対する積極性や人間関係に対する態度など、一般的に好ましいとされる態度が参加者から予想しやすいものであった。そのため、「どのような生き方をしたいか」と問われた時、どの群でもより好ましい回答をしようとする動きが生じ、記述課題・ディスカッションの影響を数値として得ることが難しくなると考えられる。デス・エデュケーションでは、本研究と同様の目標を掲げることが多い。デス・エデュケーションの効果を尺度を用いて量的に検討した際、効果が数値には表れない可能性が高いことが示唆された。

研究Ⅰにおいて数値に表れなかった効果について研究Ⅱで詳細に検討したところ、ディスカッションがデス・エデュケーションの教授方法として有効であり、また記述課題もその準備段階として有効に作用することが確認された。まず、ディスカッションの準備段階としての記述課題は、ディスカッションのテーマについて参加者が熟考する機会となること、参加者が意見を明確にできること、それによってディスカッションでの活発なやり取りを可能とすることの3点において有効に作用することが確認された。小グループディスカッションの効果としては、ディスカッション後に自分の気持ちを尊重する姿勢、日常を大切にしながら生きようという意識、人生への能動的な態度が強まったことが確認された。人間関係についても、努力を伴いながらも他者と関わり、深い人間関係を築くことへの志向の高まりが見られた。このことから、ディスカッションを行うことにより、参加者が能動的に他者と関わることへの志向を強めたことが分かる。以上より、研究Ⅱでの目標ⅰ「自分の人生により能動的な姿勢を示すようになること」、目標ⅱ「他者との関わり大切さを見出し、積極的な関わりを志向するようになること」が小グループディスカッションによって達成されたと言える。このような成果は、ディスカッションの中で他者の意見の取り入れや、取り入れた意見と参加者が予め持っていた意見とを比較吟味することによる意見の再構成、自己の意見の再検討などによって生じることがわかった。また、このような過程を経て、参加者は意見に広がりや深みを持たせることが可能になることが明らかとなった。

青年期における大学生は生に意欲的であり、一般的には死について意識することが少ないと言われている。研究Ⅱでは、ディスカッションを経ることにより、青年が生と死の問題を自分に近づけて考えることが可能となることも明らかになった。柿田・原・竹内(2008)は、青年は死を見越すことによって改めて生について考えることは可能であり、死について思索することで死を両面的に捉えやすい傾向があると述べている。死に対する両面的な態度とは、死の否定的な側面だけでなく、肯定的な側面を見出すことも可能になった状態である。したがって、死に対する肯定的な側面を見出すことは、死についてタブー視する傾向を弱め、ディスカッション終了後も参加者が各自で死について考えるきっかけを築くのではないかと考えられる。しかし、本研究ではディスカッション後の効果については検討できていない。この点については、今後縦断的なプログラムによって検討していく余地がある。

引用文献

- 秋山 智・加藤匡宏 (2003). 生涯教育の視点からの「デス・エデュケーション」の実践的研究～愛媛大学共通教育の授業展開より～ 愛媛大学教育実践総合センター紀要, **21**, 175-189.
- A・デーケン (1986). 死への準備教育 第1巻 死を教える メヂカルフレンド社
- E・キューブラー＝ロス (2001). 死, それは成長の最終段階 続死ぬ瞬間 中公文庫
- 石田美知 (2008). 看護学生の死生観構築を目指した「デス・エデュケーション (生と死の教育)」の試み 名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文学研究, **10**, 217-231.
- 板津裕己 (1992). 生き方の研究—尺度構成と自己態度とのかかわりについて— カウンセリング研究, **25**, 85-93.
- 片岡靖子・岡崎利治 (2008). 社会福祉援助技術演習におけるデス・エデュケーションの試み～社会福祉援助技術観形成過程における諸課題～ 久留米大学文学部紀要 社会福祉学科編, **8**, 1-10.
- 小松万喜子 (2000). 日本の現代の青年の死生観とその教育課題 佛教大学大学院紀要, **28**, 99-114.
- 丸野俊一・生田淳一・堀憲一郎 (2001). 目標の違いによって, ディスカッションの過程や内容がいかに異なるか 九州大学心理学研究, **2**, 11-33.
- 西山美聡・石田 弓 (2012). デス・エデュケーションに役立つ映画の検討 広島大学大学院心理臨床教育センター紀要, **10**, 100-115.
- 尾上明子・中根淳子 (2005). 生と死を考える試み—保育者養成において その2— 名古屋柳城短期大学紀要, **27**, 25-41.
- 佐伯洋子・高内正子 (2008). 「いのちの教育」に関する研究：大学生をとおして 大阪観光大学紀要, **8**, 59-68.
- 關川啓子 (1999). 生涯教育としてのデス・エデュケーションの現状と課題 川崎医療福祉学会誌, **9**, 209-216.
- 丹下智香子 (1995). 死生観の展開 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, **42**, 149-156.
- Thornton, G. (1991). Assessment of small group discussions in a death-and-dying course. *Death Studies*, **15**, 473-408.